

# 中川・綾瀬川の水辺環境創造計画



## 研究第一部 主任研究員 辻 光浩

中川・綾瀬川は、関東平野を流れる、利根川・江戸川・荒川といった大河川に囲まれた低平地を流れる一級河川である。

それぞれの河川では、古くから治水対策や舟運確保など、さまざまな目的で河川工事が行われ、これまで、一定の効果があがってきた。

その一方で、中川・綾瀬川の河川本来の自然環境の喪失や人々と河川とのかかわりの希薄といった課題が、顕在化してきた。

このため、中川・綾瀬川を、都市に残された貴重な自然環境空間としてよりよい形で次世代に伝えていくため、河川管理上の制約を踏まえつつ、水辺環境創造計画の検討を行っている。

現在、「各河川の現況把握」、「課題抽出」を終えたところであり、今後、「目標設定」「具体策の検討」を行っている予定である。

水辺環境創造計画は、各河道区間が本来持っている特徴に応じて策定することが大切である。特に、水際部の把握（河岸特性把握）が重要であると考えた。

そこで、本業務では、河川（直轄管理区間）を、その有する生物的・物理的要素をもとに、背後地の状況も含め、特徴あるまとまりを持ったいくつかの区間に区分し、評

価することとした。現段階での区分（案）は、次のとおりである。

中川

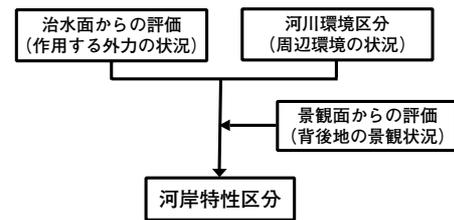
- ◇密集市街地矢板護岸区間
- ◇市街地矢板護岸区間
- ◇市街地自然堤防帯区間

綾瀬川

- ◇密集市街地護岸整備区間



綾瀬川（草加の松並木）



図一 河岸特性区分の考え方

今後、多くの制約条件を抱える中で、良好な水辺環境を形成していくため、長期的には背後地との連携が一つのポイントであると考えている。

地域の協力が得られ、かつ内容が分かりやすい「水辺環境創造計画」を策定したい。

# 多摩川の多様な自然環境の再生

## 研究第四部 主任研究員 野谷 靖浩

多摩川永田地区は、右岸があきる野市、左岸が福生市・羽村市に接する延長約1,600mの区間である。直上流に東京都の羽村取水堰があり、かなりの水量が取水されていたが、平成4年度より、下流へ通年2 m<sup>3</sup>/sの放流が行われるようになった。河道は一部に根固め等の護岸が見られるものの、低水路部については護岸が施されておらず、自然な水際線の形態を有している。

中流区間特有の砂礫の川原であるが、最近25年間で単断面形状が複断面形状に変化し、標高が低く冠水頻度が高い河床部分（低水敷）と、標高が高く冠水頻度が低い河床部分（高水敷）に明確に分かれた。これに伴い1970年代に広く分布していた河原が減少し、オギ、ハリエンジュ、オオブタクサ、ススキなどが増加した。

右岸側は、草花丘陵と呼ばれる段丘崖に面しており、ここから多摩川への湧水が、高水敷付近に湧出し、湿地を形成している。このため、本川とは異なる貴重な生物相がみられる。この一帯は河川環境管理計画において「生態系保持空間」に位置づけられている。平成12年に礫河原の造成を行った多摩川永田地区において、河川生態学術研究会多摩川研究グループの総合研究の成果に基づき市民グループや沿川自治体、河川管理者等と協力し、樹木の伐採、礫河原の造成、植生の復元などの河川環境保全・復元手法を

導入した。その効果を明らかにするため、継続的なモニタリングを実施し、効果を把握・評価し、新たな保全・復元手法にフィードバックするという、順応的管理の実践を行っている。

- 目標とする年代：1947年代、指標生物：カワラノギクなどの河原固有生物
- 再生すべき機能：河原だけでなくワンドを含めた平たい微地形に起因する扇状地特有の環境の保全



写真上：再生した礫河原（平成15年5月撮影）



写真左：カワラノギク、写真右：カワラバタ